

陸自駐屯地紹介シリーズ 第50回

磨・魁・絆 船岡駐屯地

第2施設団主力他

駐屯地シリーズ編纂委員会

上野から東北新幹線「やまびこ」で約110分、さらに東北本線に乗り換えて北上すると、西を宮城蔵王、東を阿武隈山地に囲まれた平地に入り、船岡駅に着く。小さな駅舎は入母屋造りの2階建て和風の瓦葺き、鬼瓦の内側に金色に輝く2匹の鯨が朝日を浴びている。時代めいた雰囲気は駅の西約1キロの小高い城跡に由来しているのではなかろうか。

江戸時代、3代目伊達藩主綱宗の時お家騒動が起きた。藩主は放蕩の挙げ句に隠居逼塞、跡を継いだ幼い藩主の後見役の執政に対して宿老の一人伊達安芸が幕府に訴え出る。時の大老酒井雅楽頭邸での審問の席上、後見役陣営の原田甲斐が反後見役の旗頭伊達安芸に刃傷に及び双方斬り死にという大事件に発展した。原田家は逆臣として断絶したが、その居城が船岡城であった。実は原田甲斐はお家乗っ取りを企む伊達兵部の懐深く入り込み、兵部の企みを命を賭けて暴露しようとした忠臣

だったとするのが山本周五郎原作のテレビドラマ「樅の木は残った」で、町が一転して観光名所として賑わったことである。だが今は静かな町に戻っている。ラッシュアワー時を過ぎたばかりなのに仙台行き列車を待つ僅かな人に見えるのみであった。駅の辺りに売店などなく缶コーヒーで空腹をなだめタクシーに乗る。訓練検閲中の駐屯地司令にお目に掛かれる時刻が未定であったので課業開始前に部隊に入りたかった。緑の多い地域である。7分ほど走ったところに駐屯地正門があった。正門から15分程奥まった左側に茶色の警衛所がある。前を一本の広い道路が走り約300メートル右に折れていた。辺りは豊かな緑が覆い、桜の季節の見事な景観を想像できた。警衛所から奥に進む道と、警衛所前から分かれて一車線ほどの道路が走って木立の横を抜けていた。今まで訪れた陸上自衛隊駐屯地

とどこか違った雰囲気は漂っている。警衛所受付で来隊の趣旨を申し出て指し示された細い道を辿り本部庁舎に向かった。道路の左側には施設科部隊のお家芸を発揮して大きな岩石と樹木を配した庭が造られている。道は300メートル程進むと左に折れて、その角に「隊内クラブ」(酒保)があった。通り過ぎると右側は20分程の岩山で幾つかの洞穴に倉庫が造られていた。左側には長さ約700メートル幅約150メートルの水面があり、施設科駐屯地らしい舟艇と橋梁が並ぶ。木立が切れると本部庁舎が見え、体操や車両点検をする隊員の姿があった。広報室に入り司令業務室長八島進一尉と挨拶・名刺交換をすべく隊内撮影のために倉前に出た。

◎駐屯地の沿革

海軍火薬工廠時代昭和12年、この地に帝国海軍の火薬庫「B廠」の建設が始められた。白石川が火薬製造に必要な膨大な水量を賄えること、東北地方に相次ぐ冷害・水害の貧しさを救済し得る1万人を超える働きの口が創造出来ることなどによるらしい。弾薬火薬の備蓄が急務であったことが立地条件の精査を欠き、工事開始以後幾たびかの不具合が発生した。埋め立てた土砂が一晚の内に水面下に没してしまった。

船岡駐屯地とエンジニア集団



排水路を2経路建設したが途中でパイプが切れたり折れ曲がり用をなぞず、工事責任者は自殺した。埋め立て地に建設した鉄筋コンクリート製倉庫は約1層も沈んでしまった。その倉庫は宮門から駐屯地本部庁舎に至る途中で斜めのまま現存している。とにかく東洋最大規模の火薬工場は完成し終戦まで生産を続けた。

病院併設時代

昭和5年7月半ばに船岡海軍共済病院が併設された。100名を越す職員と最新設備を備え、仙台南最大の病院といわれ一般にも開放された。戦後船岡工廠跡は米軍が接収したが、この病院地区だけは何度か看板を変えて昭和41年3月まで、最後は結核病院として診療を続けたのである。

米軍補給処時代

米軍に接収され、特に朝鮮戦争時代は弾薬補給処として使用されていた。

返還後

昭和33年米軍から全面返還され、35年愛知県豊川から第103建設大隊が移駐して船岡駐屯地が発足し、その後幾多の改編を経て現在の駐屯地に至っている。広さ約180万平方メートル(57万坪)は全国でも8番目、東北地方でも2番目に広い駐屯地で、東北方面隊施設科部隊(工兵部隊)の骨幹となる陸上自衛隊第2施設団主力が駐屯している。

◎施設団とは

陸上自衛隊は、各方面隊に直轄の施設団という施設科部隊を持ち、北部方面隊のみが編成規模を縮小した方面施設団を擁している。団の指揮官は陸将補である。団本部・付隊、1コ又は2コの施設群の他、浮橋・架橋等の器材を装備運用する器材隊、ダンプ中隊等を直轄している。施設群は1佐を長とし、機動支援、障害処理・構成、築城、水際障害構成、坑道掘削などの能力を有する部隊が編成されているが全方面隊一律ではない。団は方面直轄の施設戦闘、作業を行う場合もあれば方面隊隷下の師団や旅団などに増強される場合もある。

◎船岡駐屯地駐屯部隊

第2施設団本部及び付隊

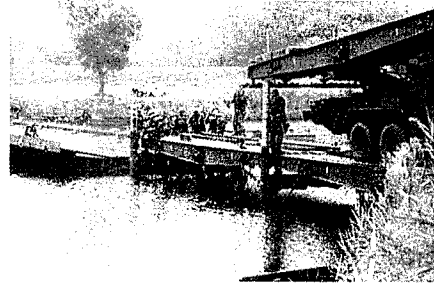
団長は白井純夫陸将補陸自77で船岡駐屯地司令を兼ねている。団本部には副団長、高級幕僚、人事、情報、作戦、兵站他の幕僚を擁し団長を補佐するとともに、本部付隊が石崎雅章1尉指揮のもと団本部の警戒、保管、輸送などの任務に従事している。

第10施設群

第2施設団隷下部隊である。矢野光宏1佐指揮のもと、機動支援中隊、障害中隊、築城中隊等機能の異なる部隊が日々訓練に励んでいる。

第10器材隊

おなじく第2施設団隷下部隊で、足達陽一2佐指揮、架橋器材等を装備して運用し渡河作業を遂行する部隊である。



架橋訓練

第312ダンプ車両中隊

同じく第2施設団隷下部隊。阿部弘之3佐指揮、ダンプ車両を装備して道路建設等多量の土砂を必要とする工事を遂行する。

第105施設直接支援大隊

仙台にある東北方面後方支援隊の隷下部隊である。船岡に分派され、施設団の整備、補給支援を行う。指揮官は鈴木勝之2佐である。

船岡駐屯地業務隊

東北方面総監隷下で、茂泉裕美2佐の指揮のもと船岡駐屯地の施設・建物・官舎の管理運営並びに所在する部隊の総務、厚生、補給、衛生等支援を行う。

行う。

船岡弾薬支処

仙台にある東北方面補給所の支処であり指揮官は大熊孝太郎2佐である。

第416会計隊

伊藤国雄1尉指揮下、船岡駐屯地各部隊の給与支払い、調達契約支払いに任ずる部隊で東北方面総監隷下の方面会計隊に直属している。

第303基地システム通信中隊

船岡派遣隊

船岡駐屯地の通信所、交換所を維持運営する部隊であり、東北方面通信群の隷下である。

◎施設群検閲

筆者が取材を希望した8月下旬は、第2施設団では第10施設群の訓練検閲期間中であつた。何とかして検閲の様子を取材出来ないものかと考えたが、日帰りで検閲取材など出来るものではなく、たとえ一場面を取材出来たとしても「良い場面を食い散らかすような取材となり、冒瀆ですらある」と感じ取られた。「訓練検閲」を叙述するならば、その真髓に触れる取材姿勢を保ちたく、今回は断念した。

訓練検閲課目の変化

筆者が現役のころ、教育訓練には確たる目標を定めた根拠があつた。これらの根拠は毎年変わることは無かつたように記憶する。その根拠は現在どの

ようになっていくか覗いて見たい気がしないでもないが、仄聞するところでは検閲課目もかなり様相を変えた部分があり、不審船などを遊弋させながら侵犯を企図している近隣某国などが訓練基準詳細を収集している可能性にも配慮し控えようと考ええる。

〔検閲に関する規則・命令等〕

部隊の訓練検閲に関する基本事項、

即ち実施時期、検閲課目など年度業務計画で明確に示される事項と、検閲一般状況、使用演習場、行動

開始時刻など部隊の迅速且

つ柔軟な指揮活動、装備品

の日頃の整備状況などを検

するために直前まで示され

ない事項がある。今回の如

く施設重機材を装備し運用

する部隊の受閲準備は、器

材整備と重機材操作能力の

錬成など部隊隊員レベルの

日頃の奮闘を積み重ねるとともに、例えば、戦闘地域に橋梁を建設する任務を与えられた時、敵情・地形を判断し、警戒自衛戦闘計画、資材推進計画、作業工程表など施設群指揮所が作成すべき諸計画と実員指揮等の精否が評価されるのである。民間建設会社の作業現

場を見学するのと大いに異なるところである。

訓練検閲を実施するに当たっては、

意外に大きな勢力が臨時に編成され

る。なにしろ群レベルの検閲になると

演習場は東北全域の演習場を機動する

こともある。受閲部隊は当然の事、検

閲官には、主任補助官や部隊補助官か

らなる補助官グループと統裁部天幕な

どを維持運営し、或いは統裁官、補助

官の移動の為の車両を運行し、或いは

資料整理の机椅子等を用意する支援部

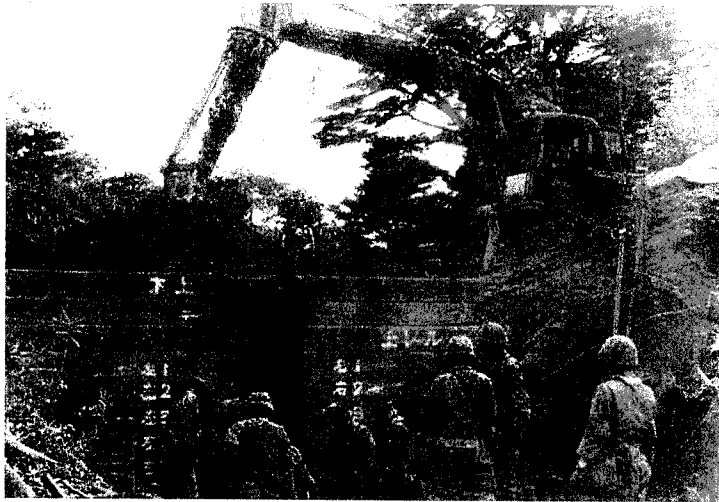
隊等が必要である。更に統裁部要員の

給食、燃料補給、仮眠施設など検閲実

施の外周で支援に当たる部隊も必要と

なる。更に砲彈落下等の戦況現示の要

員や仮設敵部隊等も必要である。施設



掩蓋指揮所の構築

団長が訓練検閲を実施するに当たっては団隷下部隊以外の部隊に対しては上級部隊たる方面総監の一般命令を以て検閲支援等の一般命令を発出するのである。

隊装検査の見所

検閲開始の態勢は一樣ではないが一

例を紹介しよう。受閲部隊指揮官の検

閲受閲にあたっての訓辭があり、これ

が終わると検閲官への受閲態勢完了報

告があり。その後直ちに隊装検査が開

始される場合が多い。個人携行品に欠

品がないか等の細部を点検する一方、

隊員各個に対し、与えられた職務の細

部、一般状況の要点などを質問し士氣

の程度や任務の理解度を掌握する。こ

れが終わると整列は解かれ、任務に従って車両重機材の傍へ待機を命ぜられ、装備品等の整備、積載状況などを検証される。精銳部隊ほど隊装検査に精気が漲っているようだ。そして「状況開始」となる。

指揮活動の見所

状況開始以後幾つかの見所がある

が、指揮活動は検閲の最も重要な場面



指揮所活動検閲中の団長 (左)

である。一般的には、掘開地に展張された大型指揮所天幕内の大部分を占める平面に30センチ程の台が作られて、その上に地図が張り合わされる。更に一般状況や敵部隊、我が部隊の配置が兵棋で示される。この台を囲むようにして受閲部隊指揮官、幕僚の席がある。この台上に刻々と変化する状況が展示され、作戦会議が開かれ、各幕僚の所掌に関する見積もりが発表され、指揮官が作戦の指針を示し作戦計画作成に移る。やがて部下部隊指揮官が招致され、作戦命令の下達となる。ここでは指揮官の決心の適否ばかりでなく決心を適切ならしむる幕僚の意見提出などが厳しく評価される。この間受閲部隊

指揮官には検閲官・主任補助官が、作戦幕僚には上級の補助官が専任で厳しい目を光らせている。なお指揮所には指揮下部隊との通信回線が構成されている。

実行動の見所

検閲間の実行行動には職種によって様々な短時間のクライマックスがあるといえる。例えば普通科、機甲科部隊の攻撃目標に向かっての突撃、特科ならば部隊挙げての集中射撃、航空科部隊のヘリボーン作戦などは、観覧者はその激しさに目を見張ること請け合ひである。

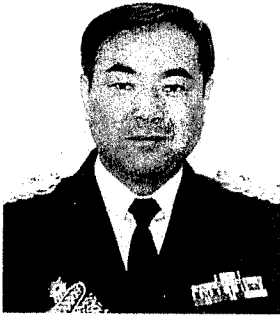
これに比し施設科の実員行動の場面には、激しさには劣るがプロの眼力を持つものには堪らない場面の味わいがある。私見であるが述べてみたい。先ず中隊長等指揮官の命令下達、隊員の技能に応じた区処、更に小隊・班レベルに於ける命令指示、実作業開始以後の要員の区処と作業指示の号令・共同連携など、これぞ自衛隊の精鋭部隊なりという場面が随所に発露される。重量作業の連続する架橋等では、ただ漫然とではなく、予め精鋭の精鋭たる要素を学んでから観覧することがより価値があると考ええる。

検閲講評

検閲終了と共に通常演習場にラッパが鳴り響く。しかし受閲部隊は真剣且

つ多忙な時が続く。人員及び資器材の異常の有無を早急に統裁部に報告しなければならぬ。人身に関する事故は特に重大視され、もし安全管理上の不備に起因する人身事故などあれば訓練検閲の優れた成果がそれこそ吹っ飛んでしまうほどなのである。報告は通常最大の速度を以て報告される。事故は無い見込みなどいい加減なことは絶対許されない。

これが終わると統裁部は多忙を極める。短時間の内に講評を整理しなければならぬ。総評は「優秀」から「不可」まで幾つかの段階がある。また指揮活動から隊員各個の動作、優秀隊員の列挙まで詳細に評定される。その内容を真に理解し納得するには、部隊訓練を体験して初めて可能な部分がある。中に検閲官の思想や哲学が含まれていることがある。それを司令表敬で痛烈に感じた。



白井陸将補  
船岡駐屯地司令

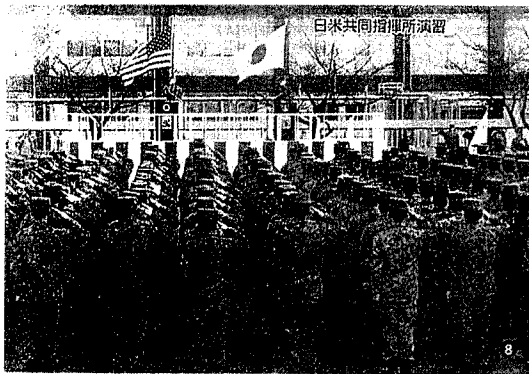
司令表敬

事前の連絡では司令表敬の時間は検

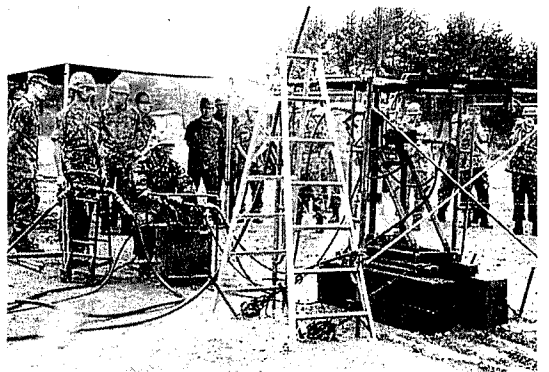
閲終了後に頂けるとのことであった。もしかしら状況終了後、幕僚諸官が講評案を起草している僅かな時間を利用して演習場から帰隊され、表敬が終わった後また検閲現場に戻られるのではないかと想像し、勿体ないと恐縮しつつ司令室へ向かう途中廊下で司令にお会いした。眼光の鋭い方で、位負けしたという感じがした。早速予め準備した質問をした。

団長としての統率方針については、「歴史と伝統を継承し如何なる任務にも即応できる部隊の育成」  
団長としての要望事項は「磨、魁、絆」

駐屯地司令としての要望事項は



日米共同指揮所演習



作井訓練



新地雷探知機による地雷偵察

「信頼される駐屯地」  
「隊員相互の信頼」  
「家族の信頼」  
「地域の信頼」とお答えを頂いた。

だがいつの間にか用意した質問事項は消し飛んだ。お話の中にルーミアニア防衛駐在官と施設学校副校長の経歴をお持ちと聞いたからである。

施設科の誇り

ルーミアニア防衛駐在官勤務間印象の主題は、対チャウシエスク革命に関するものであった。この革命で「国軍が国民側についたこと」「革命後国力の弱さを補うため情報収集を特に重視していること」「革命後は経済発展を重視していること」が挙げられたが、我が国に通じることとして「情報重視」を挙げられた。また周辺の国々、特に戦乱の地などでは命の糧の水の確保を工兵部隊に負っているお話を聞いた。これらの体験を近隣の大学に於いて講演された由、国際関係に幻想しか持たない大学生は厳しい現実の紹介に大いに啓蒙されたことであろう。

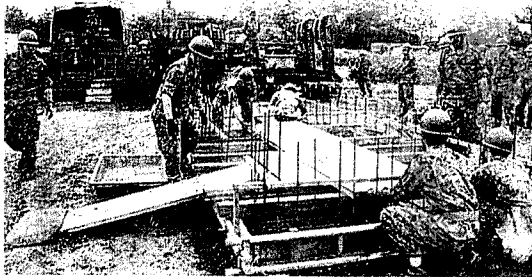
また工兵は先駆けの部隊として高い誇りを持っていること、今後自衛隊が海外任務に従事することがあれば、水の供給は需品科部隊ではなく施設科部隊が負わなければならないであろうとお話を聞いた。

我が郷土をまもれ

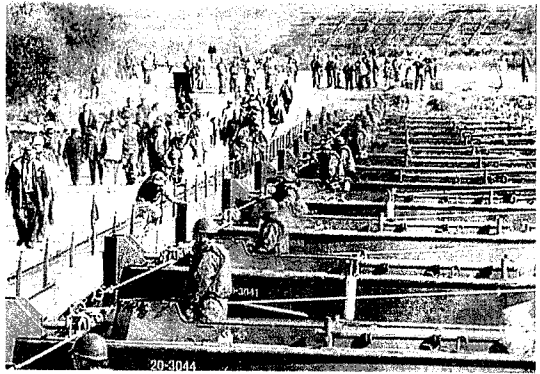
さらにお話を伺った。現在第2施設団が実践を通じての姿である。先頃実施した「エンジニア・フレアー」と銘打った施設科統一訓練には東北方面総

監・施設学校長視察の元を実施され、ここでは「航空自衛隊対空部隊陣地の構成」「民間車両も利用可能な橋梁の構成」そのほか多岐にわたる演習をおこなったことを伺った。これらの実践を重ねて「災害派遣」「防衛作戦」双方の任務遂行を念頭に置いていることが感じられた。

現在我が自衛隊の精強さは、偏った考えを持つ勢力でさえ否定することは不可能である。東チモール派遣活動、イラク人道復興支援活動その他の国際貢献に第2施設団は多くの貢献を積み重ね、一方平成20年の岩手、宮城内陸地震他多くの災害派遣に活動してきた。これら活動の中核をなす施設科部



コンクリート構築訓練



92式浮橋の架橋

隊の意義について高い誇りをもっておられることを感じた。

地域との親和

駐屯地が発行した広報パンフレットがある。末尾近くに季節ごとの駐屯地行事などが掲載されている。満開の桜の古木の下、刈り込まれた芝生に敷物を敷き、そこに家族が弁当を広げている。笑顔一杯幸せな時を楽しんでいる写真がある。その横に灯火に映し出された夜桜の並木が写っている。下に紅白の幕の前に駐屯地名物の「船岡大鼓」の面々がバチを振り上げ地域の老若男女がくつろぐ。題して「船岡駐屯地いも煮会」、豊穰の喜びを歌う宴である。

更に駐屯地創立記念観閲式の写真がある。人々が過ぎし日々を顧み、今後の精進を誓う場であろう。おわりに今回取材執筆で、施設科の未来を見据える司令の印象が一人の「工兵将校」の典型として余りに強烈なゆえに、冷静な叙述に戻ろうととして何回か書き換えたことを申し述べたい。多忙な時に取材にご協力頂いた駐屯地司令白井純夫陸将補、広報室長八島進一尉に心から感謝する。

文責 松村興延 陸自64



駐屯地さくらまつり